

# 末黒野

すぐろの

1月号  
(通巻905号)



## 酔芙蓉

風紋の影濃き浜や星月夜  
酔芙蓉日の斜めなる醬蔵  
曼珠沙華丘の墓苑のつづら折  
敬老日銀盃を手に母百寿  
交番の軒下汚し去ぬ燕  
灯を消して虫の国なる書斎かな  
薄雲の縁を彩り今日月の  
木犀の二度咲きの黄のこぼれつぐ  
木犀の金砂のこぼれ地の蒔絵  
谷の戸の夕日するりと次郎柿  
色鳥や声の主役の変はる杜  
白式部水琴窟の新の杓

森清堯

## 杖の音

舫ひ舟軋む町川月渡る  
池へ引く水路の昏しつづれさせ  
藤袴雲重き日の野の匂ひ  
ちちろ虫寺の普請の遅々として  
東屋へ飛石伝ひ萩つたひ  
払暁の生絹めく雲鉦叩  
浮島を突く初鴨水カンナ  
鯉跳ねて猫の驚く厄日かな  
明月や影引く杖の音高く  
十六夜やマリアカラスに酔ふ夜更  
眠りたる木々を濡らして寝待月  
晩秋や富士山頂のはなれ笠

岡野里子

# 素秋の風

黒滝志麻子

(顧問)

赤とんぼ夕日に舞うて米所  
 投入れの菊を飾るや呉服店  
 椎大樹素秋の風の通りけり  
 鴨渡る雲を出づれば声をあげ  
 川に出で山を見てゐる秋の暮  
 楠も椎も保護樹や里は秋  
 誰が置きし木の実に足して木の実置く  
 かたかたと垣に来てをり火焚鳥

## 甲矢集

配列は音順（月毎の循環）



### 月今宵

菅野日出子

区境の路地に散り敷くさるすべり  
 小流れの藻を踊らせて秋澄めり  
 聖堂のステンドグラス秋夕焼  
 久々の長湯となりぬ虫しぐれ  
 秋の夜やいつも机辺に電子辞書  
 試歩の道ふえし喜び金木屋  
 木犀の散り切つて坂華やげり  
 寺垣の大樹を透けて望の月  
 月今宵思はず出づる童歌  
 小鳥来る訪問看護のやさしき手

### 次郎柿

田中臥石

仲秋の句会歓喜の声挙がる  
 台風の荒れだす音や九十九灘  
 稲架径を通りほのぼの日の匂ひ  
 食うべけり波郷好みし次郎柿  
 雨の城てふや久留里の山紅葉  
 酩酊縁に並べて久留里町  
 魯田の径真直に海へ伸ぶ  
 合同句集上梓を祝ふ暮の秋  
 一盞の祝盃を挙ぐ秋の風  
 久留里城の坂の町並み時雨癖

## 虫時雨

森清信子

中島を隠す蒲の穂鯉の影  
名月や染まりて揺るる海の面  
虫しぐれ途絶ゆや闇の深まりて  
醜草に翅を休めて秋の蝶  
ぴんと干す真白きシート秋高し  
孫と酌む初めての酒土瓶蒸し  
久しぶりの星に応へて虫時雨  
輝ける真緒の糸や関所跡  
橋に凭る客待ちの水夫柳散る  
実紫枝の先まで日の雫

## 秋の蚊

石黒興平

朝顔を気ままに這はせ四つ目垣  
姫垣を越えて真白きこぼれ萩  
土つきの間引菜もらひ垣根越し  
彼岸花かろき瀬音に育まれ  
一村を豊穰にして燕去ぬ  
籠りゐて茶柱の立つ厄日かな  
急ぎ入る東司に秋の蚊の待てり  
十月や久々の句座晴れやかに  
丹沢の嶺々肅条と秋徽雨  
稲架解かれ影持つもの一つ消え

## 乙矢集

配列は音順、月毎の循環



難聴

徒

長枝の支離滅裂や今朝の秋  
師の句碑を洗ふや秋の土しづか  
師を偲ぶ胸の裏まで虫時雨  
我が町に二つの寺や律の風  
難聴の雀もゐたり鳴子引  
敬老日自己紹介に嘘すこし  
喪の文へ返辞ためらふ菊日和

花薄

岡田史女

芒

加藤静江

ほどほどの間合ひに人や秋薔薇  
稲架を解く若き夫婦や影長し  
風戯へ山頭火忌の花薄  
立ち入るを禁ずる門や貴船菊  
木の実落つ伽藍列なる参道に  
晩稲田の刈り残されし一処  
湯上りのしやぼんの匂ふ十三夜

幽かなる虫の音闇を深くせり  
野分後雲間の夕日濃かりけり  
一遍忌供華の芒の穂の豊か  
遊行忌や地鳴りの如き読経の輪  
風わたる青粉の沼や赤とんぼ  
枝垂れたる先より桜紅葉かな  
少年の落すボールや秋乾き

酔芙蓉

高木邦雄

咲きつぎて終の一花や酔芙蓉  
月山を遠見の小径野紺菊  
没入日浴ぶ稲穂の波や出羽の国  
毒茸を蹴るや憤怒の煙吐き  
学舎にまだ灯の残り十三夜  
菊日とおでこの眼鏡さがす妻  
やつちや場の糶声高く秋の朝

糸のこ草

長尾タイ

上げ潮に走る白波鱧飛び  
秒針の音の虜や長き夜  
笹舟に合はず歩巾や水澄めり  
逆らふを忘れし母や糸のこ草  
道の端や狗尾草の人恋へり  
茜雲花野に憂さの尽くるまで  
夕づくや供花に摘みたる野紺菊

竹の春

今村千年

鉦叩ときどき動く猫の耳  
七曜のはじまる朝や鷓猛る  
櫓の軋み聞こゆる渡し水の秋  
この街に風雅の仲間涼新た  
橋一つ渡れば嵯峨野竹の春  
長き夜や夢の続きをまたも見て  
町裏にボサノバ流る秋深し

小鳥来る

大川暉美

四方の風渡る里山花芒  
荒畑の風の薄や空掃きて  
稲の香の渉る里道風の道  
三寸の櫓を渡る風やさし  
走り根にそひたる草の紅葉かな  
栈橋に引揚げの碑や小鳥来る  
めがね橋渡る色なき風の中

流刑地

太田良一

捨畑の錆たる鍬や穴まどひ  
貝殻のつぶやく浜や秋没日  
灯火親し貰ふ俳誌に知人の名  
読み返す敬老の日や墮落論  
光背を背負はぬ仏陀秋寒し  
色変へぬ松の守る寺義士の墓  
流刑地が生まれ故郷や鳥渡る



# 青炎集

森清 堯選

横浜 荒井貞子

赤のままなかなか会へぬ三姉妹  
とんぼうの風に自在の川面かな  
戸惑へる朝の気温差秋暑し  
友達の関西弁や秋うらら  
読み終へてまた開きけり長き夜  
台風過青空走る白き雲

横浜 布施由岐子

横浜 小林清子

雲の波に吞まるまでや今日の月  
秋分や暮鐘半時早くなり  
はしごする病院三つ残る虫  
源平池の黙や色なき風の中  
粧ふ山の細波に揺れてをり  
忘却を重ねて秋の更衣

横浜 大内由紀

大網白里 鈴木礼子

なんきんや戦ひ挑む二つ割り  
夕星の飛驒の山山濁り酒  
妣の好みし秋明菊や朝日影  
色鳥や小さき口の小さき実  
かさこそと何の気配や木の実ふる  
秋時雨の鳴立沢や源義忌

酔芙蓉秘めたる念ひ色にかな  
溝蕎麦に埋もれてをりぬ水の神  
貯蔵庫に扶持の新米積まれけり  
力抜く考の揺り椅子銀木犀  
沖に波立ち日に熟る次郎柿  
色愛しむ十月桜風吹くな

三鷹 小林清彦

横浜 渡辺富士子

独酌や色なき風に身を委ね  
十六夜や心残りの多過ぎて  
小夜嵐寝付けぬままに九月尽  
またひとり舞台を降りて今朝の菊  
零余子飯不平は言はぬ大家族  
ままならぬ身の置き処暮の秋

二千年の樟の大瘤処暑の風  
秋扇約束はたと思ひ出し  
不自由のリモート授業鉦叩  
細胞の弾け育つ子柘榴の実  
吾亦紅一人よがりを笑はれり  
卓袱台にどんと大鍋落花生

横浜 渡辺美智子

平塚 尾崎千代一

孤独死も諾のひとつや良夜なり  
逆打ちの女人ひとりや秋遍路  
待つ人の無きへただいま秋の暮  
守るかに水子地蔵へ赤とんぼ  
爽やかやくつきり残る筈の目  
秋うらら母子は鳩に囲まれて

秋風やたたむ旅館の蔵の影  
珈琲を淹るる机上や秋の蠅  
秋晴やベッドの母へ床屋の来  
三行の介護日記や虫の声  
朝光の鉢の木瓜の実数へたり  
石庭に異人の黙や秋の雨

横浜 岡美智子

横浜 伊藤由良

みぞそばや水辺の道へ這ひ出して  
ペルシアの風のにほひや大石榴  
杜鵑草かたまりあるもなほ佗し  
紅白を寄せて結びて水引草  
追ひかくるうしろ姿や秋の風  
蟋蟀の髭を振りつつ草の庭

大声に呼ばるる夕べ赤とんぼ  
秋麗や絵に残したき昨日今日  
佗びしらにたちまち暮れて秋の夕  
鱒雲一鱗づつの茜かな  
老の手にあまりある萩刈りにけり  
萩刈りし後の空間ぼつかりと

# 耕 土 集

## 岡野 里子 選



アイロンの余熱に触るる寒露かな 横浜 市川 夏子  
月光をふはり纏ひて家路かな  
風を得て暮色織り込み草紅葉  
一群のひかりとなりて稲雀  
日を浴ぶる柿のたわわやカフェテラス

蜻蛉の過ぎる速さや鏡池  
純粹に生くるは難し蛭草  
散り初むる萩に重たし通り雨  
湿原も空も果て無し草の絮  
深秋や伏されて並ぶ貸ボート  
葉山 伊藤 美緒

糠雨にしだれて萩の葎かな 印西 大坂 正  
束の間の沼の輝き秋入日  
刈り残る稲田一枚谷津の暮  
直角に畦の交はる刈田かな  
岩肌に光を集む蔦紅葉

白鼻心罫より見上げ星月夜 横須賀 梅野 宏子  
大漁や一天占むる鯛雲  
どんぐりを二つ握つて通園児  
黒犬の背に乗りたり草の絮  
青蜜柑まつ仏壇へ香り置く

はらからの恙無しやと今年米 横浜 平田 きみ  
豊の秋大中小の飯茶碗  
弦月や汽笛三つの飛鳥Ⅱ  
学舎の斉唱清し紅葉月  
淋しいと妣の一言稲刈つて

戦中の話を子らに秋彼岸 横浜 杉山 善信  
包丁を捉へ離さぬ南瓜かな  
山間の川瀬を流る薄もみぢ  
秋風や歩け歩けと背中より  
店頭の小振りなれども初秋刀魚

難解のクロスワードや夜の長し 横浜 大庭美智子  
置き去りのブルドーザーや秋夕焼  
こだはりの八掛の色秋袷  
時としてオートテニスや馬肥ゆる  
リズムよき庭師の鋏松手入

アドバルーン青き秋天限りなく 横浜 毛利 直子  
園庭に跳ぶ子走る子秋日和  
名月や遠く住む子も見居らむ  
映画観て余韻の重し秋の暮  
紅葉の彩を話題に俳句会

廃校の木々に降るこゑ小鳥来る 横浜 白居 澄子  
接種後の子の高熱や冷まじき  
団栗の踏み砕かれぬ散歩道  
伸びきつてクレーン三基秋高し  
颯と来て颯と消えたり秋の蝶

中天の月影明か竹林 横浜 須加 葉子  
受賞の報妣へ告げなむ空高き  
磴に坐し秋日眩しき一人かな  
葉鶏頭山の畑に遇ふ古老  
玻璃ごしの露けき庭や老夫婦

読経に和すかに続く蝉の声 横浜 森 竹治郎  
台風の外れたる風の丸きかな  
秋晴やされど一人の詰将棋  
くだ巻いてみたまき時あり濁り酒  
団栗や鼓打つごと屋根を打つ

草の葉に転ぶ朝露ほまち畑 横浜 秋山 文子  
ひぐらしやそつと厨の窓を開け  
また来るねと墓に声かけ曼珠沙華  
旋回のヘリコプターや鱗雲  
秋寂ぶや部屋に花など飾りもし

道の辺や雨にすくつと曼珠沙華 横浜 玉川 利江  
テレビ見て過す終日秋の雨  
友よりの快気の便り秋澄めり  
秋日和にぎはひ戻る中華街  
秋風や一步一步と野毛坂を

光年の秋星仰ぎ喜寿五尺 横浜 伊藤 鴉  
居待月待てど叢雲七変化  
竹の春細道登る配膳車  
秋灯やワンフィンガーを未亡人  
光陰の果つる灯や木守柿